



慈林小だより



令和7年度 10月号 令和7年9月30日(火)

世界陸上に見た「非認知能力」

校長 石原 昌治

「暑さ寒さも彼岸まで」とはよく言ったもので、記録的な暑さだった日々比べると、幾分過ごしやすくなってきた今日この頃、早いもので、今年度の学校生活も折り返しの時期になりました。

さて、世界中のトップアスリートたちが集い、連日歓喜に沸いた東京 2025 世界陸上が先日閉幕しました。恥ずかしながら、若い頃陸上を少しかじっていた私としては、「地球に生まれてよかったー！」でお馴染みのあの人が出てくると、つい興奮してしまいました。この大会では、多くの大記録が生まれましたが、結果以外において、様々な感動を競技後のインタビューから受け取ることができました。どの選手も、これまで応援し、支えてくれた方々に感謝の言葉を必ず述べています。他者の立場や思いに立つことができる(「思いやり・共感性」)人達だなと感心します。特に、110m ハードル代表の村竹ラシッド選手が、悔しさで泣き崩れたあと、「自分の足がもつ限り、何年かかってもメダルを取りたいと思います。」と、前を向いて再び挑戦しようとする姿(「やり抜く力」)は、胸に刺さりました。

いま、テストなどでは計りにくい「非認知能力」という言葉が注目を集めていることは、よく知られるようになりました。「思いやり・共感性」「やり抜く力」「コミュニケーション力」「忍耐力」「自尊感情」などの力です。さきほど世界陸上の例を挙げましたが、この非認知能力を高めることが、以前ここに書いた「ウェルビーイング」の向上に重要な役割を果たすことが分かってきました。

では、非認知能力をどう高めていけばよいのでしょうか。本校では、授業だけではなく、学校生活全体の中で「振り返り」をすることを意識しています。学校では、予期せぬことが多々起きます。その場面を大切な経験や学びに変えるようにしています。例えば、児童同士のトラブルがあったときには、なるべく丁寧に児童自身の行動を振り返らせ、今後の行動を自己決定させるようにします。授業においても、「何を学んだのか」「何が分からないのか」「なぜできるようになったのか」「次はどうしていきたいか」など、「振り返り」の時間を設け、次の目標を自己決定するを通して非認知能力を高めようとしています。

「非認知能力」を研究している中山芳一氏(AII HEROs 合同会社代表)は、子どもへのよりよい関わりかたについて、次のように提言しています。

大人が要望を押しつけるのではなく、子どもを一人の人格者としてとらえ、自ら選択や決定ができるための機会を確保すること。

本校では、これから運動会や音楽会をはじめ、多くの行事が予定されています。学校生活における様々な経験を大切な学びに変え、非認知能力を高めていけるよう引き続き工夫を重ねてまいります。家庭・地域の皆様におかれましても、児童が自分を振り返り、これからの行動や目標を自己選択・自己決定できるような機会を是非整えていただければと思います。